

6 波であふれている世界

音源
高層天気図 (動画)
スピーカ
java applet viewer : Doppler
ドップラー効果動画
音の速さの映像 (大科学実験)
バネ
レーザーポインタ
サウンドジェネレータ (モスキート)
generato(PC ソフト「はつね」, 6kHz 以上はうまくない。)

これまで、様々な物体の運動の性質について考えてきました。力と運動の関係は、運動の法則で結びつけられていることがわかりました。また、その運動の例として、回転運動も見てきました。今回は、回転運動や、回転運動と関係がある振動現象、そして、振動現象が連続して起こっていると考えられるような波についてお話ししたいと思います。

6.1 波の例

それでは、波にはどのような例があるでしょうか。実際には、実に様々な波があります。ここで、波の例を挙げてみましょう。

- 水面を伝わる波
 - － 海面の波
 - － コップの表面に口で風を送ったときにできる波
海の波とは性質がやや異なります。
 - － 津波
- 真空中を伝わる波
 - － 光
 - － 電波 (電磁波)
実際には、光も電磁波の一種です。
- 空気中や物質内部を伝わる波
 - － 音
 - － 大気の浮力による波
 - － 地震
 - － バネを伝わる波
 - － 好天・悪天の変化
寒波とか熱波とか呼ばれているものも広い意味での波です。

- 神経細胞からの信号
 - その他の波
 - 電子・物質
- 私たちの身のまわりに存在する物質を構成する電子、あるいは、物質その物も波であると考えられます。

このように、わたしたちの身の周りには様々な波があることがわかります。それでは、人間にとって波はどのような役割を果たしているのでしょうか。ここでは二つの観点を紹介しましょう。

エネルギーを伝える波

波はエネルギーを伝えます。例えば、太陽から届く波である光 (や電磁波) は、地球にエネルギーを届け、地球を温めます。近年注目を集めている太陽光発電も太陽から波として届くエネルギーを電気に変えるものです。

身近な所にも、電磁波を使ってエネルギーを伝えています。例えば電子レンジです。電子レンジでは、特別に水だけを温める電磁波を電気を使って出します。すると、食品中の水が温まります。IH クッキングヒーターは、下から電磁波を出してフライパンに当て、フライパンを直接温めます。

海の波もエネルギーを伝えます。海の波を使った発電である波力発電も行われています。ただし、発電効率が低いためにあまり利用されていません。津波もエネルギーを伝えています。津波が陸上の物体を押し流すのにはエネルギーが必要です。そのエネルギーは津波自身が運んでいます。

地震もエネルギーを伝えています。地震では、揺れる場所で岩盤が破壊されているわけではありません。岩盤が破壊される領域 (震源域) はごく限られています。岩盤が破壊されたことによって発生したエネルギーが波として伝わります。震源から離れたところにある物体を動かすためのエネルギーは、地震の波が伝えています。

このように波にはある場所で発生したエネルギーを別の場所に伝える役割があります。

情報を伝える波

例えば、私たちが会話することを考えてみましょう。人が話すとき、声を出します。そして人は声を聞きます。こうして意志を伝えることができます。ところが声は音です。音という波に言葉をのせることで、思っていることを伝えることができるのです。

あるいは、私たちは物を見ることができます。光の無い真っ暗な中では物を見ることはできません。物が見えることは、物が光を浴びて、その表面からはねかえった光を目で受け止めていることなのです。物の形や色と言った情報を、光という波が伝えているわけです。

また、神経細胞を伝わる情報も、波として伝わっています。私たちが「何かを感じる」のは、体の感覚器官から脳へ情報が伝わるからです。その情報を伝えるのは神経を伝わる波です。このように、皆さんが外界を感じることができるのは、身のまわりに波があるだけでなく、その波を受けて、神経を伝わる波の働きがあるからです。

また、波が信号を伝える性質を、人間は積極的に使ってきました。電磁波を用いてテレビやラジオの放送を行っているのは、電磁波には情報を伝える性質があるからです。ラジオの AM

波、FM 波、地上デジタル放送の波、BS 放送の波、携帯電話間の赤外線通信など、通信手段として利用しています。

6.2 波の特徴を表わすもの

これから波の性質や、その性質を利用した様々な現象を見ていきます。しかし、その前に、波の特徴を表わすためにどのような点に注意すべきか、いくつかの点を挙げます。

縦波・横波

今度は、波の伝わる様子を観察してみます。ちょっとこれは難しいので、よく見てみてください。ここに、おもちゃのバネがあります。このバネを伝わる波の様子を観察してみましょう。波といいますから、皆さんは、このような波を想像するかもしれません。もちろん、これも波です。しかし、このような波もありえます。これも波です。この違いがわかるでしょうか。また、この違いはどのように表現したらいいでしょうか。

ここで、バネの各部分がどのような運動をするか、観察してみます。すると、こちらの波の場合には、こちらの方向に、こちらの波の場合にはこのように振動していることがわかります。これを、波の伝わる向きと合わせて考えると、一方は波の伝わる向きと振動の向きが揃っているのに対して、一方は、波の伝わる向きと振動の向きが直交していることがわかります。

この違いを表現するために、「縦波」「横波」という言葉を用います。この表現はよくない表現です。普通、縦と横は、重力の向きに合わせて決めたり、見ている人と物の位置関係で決まったりします。ところが、ここでいう波の場合にはそうではありません。波の向きに沿って振動する波を縦波、波の向きとは直交する方向に沿って振動する波を横波といいます。これは、しかたのないことなので、あきらめてください。それでは、これが理解できたか確かめるために、このような振動が縦波か横波か、考えてみましょう。どちらだと思いますか？ 答えは、横波です。

速さ

一般に全ての波には、波の伝わる速さがあります。

この映像を見てみましょう。これを見ると、音がある速さをもって伝わっていることがわかります。これは皆さんも経験したことがあるのではないのでしょうか。例えば大きな野球場やサッカー場で遠くで、一つの歌を歌おうとすると、タイミングがずれてしまって、うまく合わないことを経験します。これは、音の速度がそれほど速くなく、野球場やサッカー場を横切るのにかかる時間は、歌のタイミングがずれるには十分な時間であることを意味しています。

波の速さは概ね次のような値です。

- 音：340m/s (温度によって変わります。)
- 光：30 万 km/s (真空中の値。物質中ではこれよりも遅くなります。)

東海道新幹線には、「こだま」と「ひかり」が(現在は「のぞみ」も)あります。しかし、実際には音と光の速さは格段に異なります。光の速さ非常に速いです。これを表現するのに、よく、「1 秒間で地球を 7 回半回る速さ」と言ったりします。地球 1 周はだいたい 4 万 km なので、7 周半で 30 万 km になるからです。

この速さの違いを日常生活でも体験することがあります。遠くの花火は、見えてから音が響くまでに相当な時間がかかります。これは光に比べて音が遅いことの現れです。また、雷が近くで落ちると、光と音をほとんど同時に感じます。しかし、遠くで落ちると、稲光がしてしばらく経ってから雷鳴を聞くこととなります。これも同様に音が遅いことを表しています。この速さの違いから、落雷が地点と自分との距離を見積もることもできます。光については、あまりに速いので、同時と考えてもいいです。一方、音速は $340[\text{m/s}]$ 程度でした。そこで、稲光を見てから、何秒後に雷鳴が聞こえたか調べ、その秒数に $340[\text{m/s}]$ を掛け合わせれば、距離がわかることとなります。

この他の波の速さについても勉強しておきましょう。

- 地震の P 波 ($5 \sim 7\text{km/s}$)

地震の P 波 (P は Primary の頭文字) は縦波です。地中を伝わる音波と同様の波です。一般に固い材質のものは音波が速くなる傾向があります。

- 地震の S 波 ($3 \sim 4\text{km/s}$)

地震の S 波 (S は Secondary の頭文字) は横波です。地震の大きな揺れをもたらすのは S 波の方です。

ちなみに、波の速さの違いを利用して、緊急地震速報が実用化されています。緊急地震速報では、まず、観測網にかかった P 波を解析します。そして、その様子から、震源域と地震の規模を推定します。そして、ある場所について、何秒後に S 波 (大きな揺れ) が到来し、その揺れが震度いくつであるかを見積もります。そこで、原理的に、震源のすぐ近くでは役に立ちません。ある程度離れたところであれば、揺れる前に情報が来るので防災上、とても役立つ知識となります。

19

波長

ある瞬間に波の様子を観察したとします。この時の峰と峰の間隔を波長と言います。谷と谷の間隔でも同じことです。同じ状態が繰り返すようになる長さのことを波長と言っています。

振動数

- 振動数とは

次に、1 秒間に何回振動するかを表わしたものを振動数と言っています。単位は Hz (ヘルツ) と言います。たとえば、 20Hz は、1 秒間に 20 回振動することを意味します。 440Hz は、1 秒間に 440 回振動するという訳です。 10kHz という表現では、「k」が 1000 を意味するので、1 秒間に 10000 回振動する、といった具合です。

波が伝わってくるのを観測すると、観測者は次々と峰と谷を観測します。この時、1 秒間で何回峰を体験したか、が振動数になります。こうした事情を考えると、振動数と波長と波の速さにはある関係があることが予想されます。実際、波の速さが速くなれば、どんどん山と谷が来ますから、振動数は大きくなります。一方、波の速さが一定である

¹⁹今後取り入れたい話題
 どうって光の速さを測るか?
 ガリレオ・ガリレイ
 レーダーによる木星観測
 マイケルソンとモーリー

場合には、波長が短い方が、次々と峰と谷ががやってくることになります。そこで振動数と波長の間には、

$$\text{振動数} = \frac{\text{速さ}}{\text{波長}}$$

という関係が成り立ちます。

- 振動数と人間の感覚

振動数は人間の感覚と結びついています。最初に音について調べてみましょう。

この音を聞いてみてください。皆さんは音に高さがあるのを知っていると思います。次の音はやや高い音です。音をどんどん高くしていくと、やがて人間には聞こえなくなってしまいます。それを実際に試してみましょう。ここで、ちょっと、皆さんに目を閉じてもらって、音が聞こえている間だけ手を挙げてもらいたいと思います。

このように、高い音になると人間には音が聞こえなくなります。人間が音を感じる範囲を「可聴範囲」といいます。一般に、20Hz(ヘルツ) から 15kHz(ヘルツ) 程度であると言われていています。しかし、個人差もあります。また、同じ人でも、年齢と共に段々聞こえなくなってきます。例えば、この音は聞こえるでしょうか。聞こえる人もいますが、私には聞こえません。

- 音色

ここで教材として利用している音は、機械が発生している音で「正弦波」と呼ばれる波の形をしています。そこで、ただ一つの振動数をきちんと決めることができます。しかし、一般的に音を発生させようとするとき、どうしても色々な振動数の音が混ざって発生します。その混ざり具合は、楽器の種類によっても、違いますし、楽器一つ一つでも微妙に違います。それが「音色」になります。これを人工的に組み合わせさせて発生させるのが「シンセサイザー」と呼ばれる機械です。シンセサイザーは、楽器の音色になるように、わざといろいろな振動数の音を混ぜています。

- 色

光も人間の感覚と対応しています。光の場合には、振動数ではなく、波長を用いることが多いです。人間は、400[nm](紫) ~ 750[nm](赤) 程度の波長の光を感じるすることができます。その波長によって色が変化するように感じます。

6.3 波の性質

波には様々な性質があります。

6.3.1 反射

反射はよく知られた現象です。入射角と反射角が等しくなります。この性質を用いると波を集めることができます。BS 放送のアンテナとして利用されるパラボラ (放物面) はその例です。パラボラに平行光線が当たると、波は1点に集中するようになります。

このしくみは、ソーラークッカー (太陽熱を利用した調理器) や、より大規模な太陽炉と呼ばれる装置にも利用されています。

6.3.2 屈折

屈折もよく知られた現象です。屈折のために、普段は見えないようなところが見える現象があります。例えばコップの中に水を入れた状態と入れていない状態では、見える範囲が異なります。

屈折という現象は、波の速さと関連があります。空気中では、光の進む速さは真空中とあまり違いありません。ところが、水やガラスの中では、光の速さは数 10% 遅くなります。波の峰が線状に水面に突入することを想像してみましょう。すると、波の速さが異なるために、波の峰を結んだ線は曲がるのが予想されます。これが屈折です。

6.3.3 回折

ここで、海の波を想像してみましょう。そして、堤防の隙間から入り込んだ波はどのようになるかを想像してみましょう。入り込んだ波はこのようになるでしょうか。実は、このようになります。堤防の影にも波が回り込むのです。

スピーカーが物陰に隠れていても音が聞こえたり、東京タワーが見えないところでもテレビを見ることができたりするのは、波が物体の物陰に回り込んだり、狭い隙間を通るとそこから広がって伝わるからです。このような現象は回折と呼ばれています。

光の回折はレーザーポインタでも示すことができます。レーザーポインタの前に指をかざして、指の間にレーザー光線を通します。指の間隔を狭めると、レーザーポインタの光が広がる様子が観察されます。

6.3.4 干渉

波の性質のもう一つの例として、干渉を挙げたいと思います。「干渉」は、複数の波が重なり合ってお互いに強め合ったり弱め合ったりする現象のことをいいます。例として、今、ここで音を出してみます。音は、教室内の二つのスピーカから出ますので、その近くでは音が大きいと考えられます。しかし、必ずしもそうではなく、場所によって音が大きくなったり小さくなったりするのがわかるといいます。今、自分のいる場所から少しだけ体を動かして耳の位置を動かしてみてください。音の大きさが変わるのがわかるといいます。

模式図で示すとこのようになります。ここにあるのが音源-スピーカ-だと思ってください。そこから広がる二つの音波は場所によっては強めあい、場所によっては弱めあいます。その結果、波が強められるところと弱められるところが発生します。

この仕組みは、ノイズキャンセリングヘッドホンなどに使われています。この図はソニーのヘッドホンについての図です。ここにマイクがあり、外部からの音を拾っています。拾った波をちょうど打ち消すような音波も同時に出すことで、耳の中に広がる音はヘッドホンステレオの音源だけで、外部からの雑音は打ち消されることとなります。

6.4 大気中の光学現象

この様な波の性質は大気中の諸現象に関連しています。

蜃気楼

大気中の空気の密度 (濃さ) は場所によって異なります。それに応じて光も屈折します。光が大気中で屈折することによって起こる現象の代表的な例が蜃気楼です。

逃げ水と呼ばれる現象もその代表的な例です。夏の熱いときにアスファルトが濡れているように見えることがあります。ところが、近づいているとそこに水はありません。このような現象は「逃げ水」と呼ばれています。

虹

虹の成因について、子供のころに反射と屈折が原因であること、また、屈折は光の波長によってことなるために虹の七色が分解されて現れることを教わったかもしれません。

しかし、話はそう単純ではありません。それが証拠にこのような虹が観測されます。これは過剰虹と呼ばれる現象です。実際には干渉も重要な役割を果たしています。

幻日

幻日は太陽が2つとか3つとかに見える現象です。これは雲を形成する氷の中に太陽光が入って、氷の中で反射と屈折をすることで見られる現象です。

彩雲

真珠のように輝く雲は彩雲と呼ばれています。彩雲は、細かい雲粒のまわりを回り込む光の回折と干渉が重要な現象です。

6.4.1 ドップラー効果

さて、このような波の特徴を表す言葉がわかれば、ドップラー効果について理解することができます。ドップラー効果についてはビデオを見てみましょう。

このような実験は、なかなか普段行うことができません。NHK の教育番組ならではと言えます。

さて、このようなドップラー効果はどのように理解したらいいのでしょうか。これを考えるためには、このような図で理解するといいいと思います。音を出しながら音源が移動している場合、前方では波の波長が短くなるのが観察されます。そのため、音源の前方で音を聞くと、短い時間にたくさん振動することになります。これは音が高くなったことに対応します。一方、後方では、逆に波長が長くなります。そこで、音源の後方で観察すると、同じ時間でも振動の回数が減り、音が低くなります。まとめると、

- 前方：波長が短く、振動数は大きい 高い音
- 後方：波長が長く、振動数は小さい 低い音

となります。

ドップラー効果が起こるのは波の特徴です。そこで、光の場合にもドップラー効果が起こります。